

保育における表現力豊かなピアノ奏法の提案

— 童謡の旋律に着目して —

和田 絢子

1. はじめに

筆者は東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校（以下本校）にて副科ピアノの非常勤講師として勤務する傍ら、2019年度より私立M保育園（茨城県M市）にて保育士（以下受講生）及び園児に対するピアノの個人指導を行なっている。受講生は専門的な指導を受けた経験が少なく、それ故に、特に表現をする技術に向上の余地があると筆者は感じている。受講生に対する指導は、筆者がいかに専門的な知見を前提とし指導を行なっているかを認識する契機となり、以来、筆者の知識や演奏技術を一般化する方法の検討を重ねてきた。本校にて副科ピアノを履修する生徒にも、専攻楽器の演奏は非常に優秀ながら、ピアノという副専攻は専門的な指導を受けた期間の短さ故にその能力を十分に発揮できずにいる者がいる。副専攻の演奏の充実は、必ず主専攻の演奏の支えとなる。本校の生徒は将来様々な場面で指導を行う立場に立つ可能性も大いにある。筆者が受講生への指導を研究し得た結果は、本校での指導にも還元することができると考え本論の執筆に至った。本論では、保育の場における音楽やピアノ奏法に焦点を当てた先行研究及び実際の指導例より、表現力を伴ったピアノ演奏法に焦点を当て論ずる。

1-1 保育における音楽の役割

子どもに対する音楽教育の影響力の大きさをドミトリー・カバレフスキー（1989）は以下のよう述べている。

音楽の教育的な力は、子供の芸術的な感性や創造的なイマジネーションを育むだけではないのです。生活や人間に対する愛、自然や自分の国に対する愛をも育むことを知らなくてはなりません。また音楽は、他国の人々に対する友愛の心や関心を引き起こすものでもあります。（p.19）

保育における音楽活動も、上記の教育的な力が発揮される場面の一つであると考えられる。

保育所保育指針解説（平成30年3月）には1歳以上3歳未満児の保育における「表現」の領域内に「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」（フレーベル館、2022、p.171）という項目がある。ここには、この頃の子どもにとって音楽とは様々な感情を与える存在であり、「子どもが体の動きと音楽やリズムのつながりを、心から楽しむ経験を重ねること」（同前、p.171）が重要であると示唆している。また、「うたを歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする」（同前、p.173）という項目においても歌は「保育所や保育室が子どもにとっ

て更に安心して自分を表現できる場所」(同前、p.173)となるために重要であると説いている。これらの項目から保育の場における音楽活動は、子どもの多様な感情や表現の芽生えを支えていることが確認できる。さらに、保育所保育指針解説の3歳児以上の保育における領域「表現」内の「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」(同前、p.274)という項目は次のような言葉で締めくくられている。

保育士等などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、子どもが音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。このように、幼児期において、音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。(同前、p.274)

以上により、保育の場において音楽は子どもの表現や感性を引き出すために重要である。

1-2 保育者に求められる音楽的資質

横井志保(2021)は保育士の語りを分析した上で、子どもの表現力は保育士との表現の呼応により豊かに育つと指摘をしている(2021、p.15)。川見夕貴・峯村恒平(2023)も、保育者の音楽的な表現について保育者の認識という観点から研究を行い、「保育者の音楽的な表現は、子どもを音楽的な表現へと動機づける一要素であり、子どもの表現を支えるものである」(2023、p.23)と論じている。保育所保育指針解説(平成30年3月)において1歳以上3歳未満児の保育「表現」領域に子どもの表現力は「保育士等が自身の感性によって捉え、表現したことを取り入れながら育まれていく」(2022、p.169)と記されていることから、保育者の表現力が子どもの感性や表現に大きな影響を与え得ることが確認できる。保育者が表現を行う場は様々な場面が想定されるが、歌唱や楽器演奏での表現力もその一つであると筆者は考える。国家資格である保育士試験の実技項目「音楽に関する技術」では弾き歌いが課せられており、求められる力として「総合的に豊かな表現ができること」(全国保育士養成協議会、実技試験(後期)概要、9月10日閲覧)と明記されている。したがって、保育の場における「豊かな表現力」を伴ったピアノ伴奏は保育者にとって重要な音楽的資質であると筆者は考える。

1-3 現状の課題

上記のとおり保育者には音楽的資質として「豊かな表現力」を伴った演奏が必要である。しかし、実際の保育の現場においては、子どもの顔を見ながら弾いたり手遊び・指遊びをたくさん知っていたりすることが重要とされ、ピアノ伴奏の「豊かな表現力」は重要視されていない(近藤久美・吉弘淳一、2002、p.634)。保育とピアノに関連する先行研究の内容は、音楽経験が少ない入学者が増えている経緯(岩佐明子ら、2015、p.21)から、養成機関における指導内容等、初学者に対する指導やカリキュラムに関する研究が多数を占めている。保育における具体的なピアノ演奏法に関する先行研究も、保育者の弾き歌いにおける簡易伴奏の提案(林京平、2022)や、弾き歌いの単音伴奏法やアレンジの提案(森田千智、2020)等、伴奏方法の提案が多い。これらは保育者の弾き歌いや養成機関での指導の発展に寄与する重要な研究である。しかし、伴奏法と表現力豊かな演奏は習得過程が必ずしも一致しておらず、伴奏法の研究のみで「豊かな表現力」を伴った演奏の実現をすることは難しい。にもかかわらず、保育者のピアノ伴奏における表現力を重点的に論じ、技術を高めるための具体的な提案を行なっている先行研究は少ないように思わ

れる。

2. 研究の内容と方法

2-1 研究内容

ここまで、保育者にとって「豊かな表現力」を伴ったピアノ演奏が重要な音楽的資質である点、それにもかかわらず、表現技術を向上させる具体的な手法に焦点を当てた研究は多くなさそうであるという課題が確認された。以上により、本論では「豊かな表現力」を伴ったピアノ奏法に焦点を当て、実際の指導例を基に奏法の提案を行う。

2-2 研究対象

研究対象は、筆者の個人指導を受けている M 保育園（茨城県 M 市）の保育士 4 名である。筆者は 2019 年度より M 保育園で週に 1 度の個人指導（30 分）を行なっている。使用楽器はグランドピアノである。主として西洋音楽の作品を教材として使用し、対象の希望がある場合のみ、童謡や音楽劇の伴奏の指導も施している。研究にあたり 2023 年 4 月から 8 月の期間内には園で「月の歌」として取り組んでいる童謡も指導するという形式をとった。研究対象の専門的なピアノ指導を受けた経験や習熟度は表 1 の通りである。

表 1 研究対象の経験値及び習熟度

保育士	勤務年数 ⁽¹⁾	専門的な実技指導を受けた経験 / 期間 ⁽²⁾	習熟度
A	15 年	短期大学でのピアノ・グループレッスン / 2 年間	バイエル上級程度 / 読譜を自身の力で言い間違えずに最後まで弾くことができる。強弱記号等の読み取りには筆者の声がけが必要である。
B	17 年	短期大学でのピアノ・グループレッスン / 2 年間	バイエル中級程度 / 読譜を自身の力で言い間違えずに最後まで弾くことができる。バイエル初級程度の簡易な作品であれば筆者の指摘を受け演奏に表現を加えることができる。
C	8 年	エレクトーン・個人レッスン / 幼少期より約 10 年間 短期大学でのグループレッスン及び個人レッスン / 2 年間	チェルニー 30 番 / 程よいテンポを用い演奏することができる。強弱記号や楽語を意識し演奏することができるが、表現の幅に更なる上達の余地がある。
D	17 年	幼少期よりピアノ・個人レッスン / 約 10 年間 短期大学でのピアノ・グループレッスン / 2 年間	チェルニー 30 番 / 程よいテンポを用い演奏することができる。強弱記号等の知識があり演奏に反映しようとする意思を常に持っているが音として十分に反映されていない。

なお、倫理的配慮により各人に対し事前に本研究の目的や内容を説明し、本論において表 1 の情報を開示する点、指導内容を研究し本論にて発表する旨に関し許諾を得ている。

4 名ともに養成機関卒業後は業務内の演奏により独学で研鑽を積んでいた。勤務年数から、ピアノを弾く経験を長く積んできたことが見受けられる。しかし、2019 年度の個人指導開始時点で、受講生の表現に関する演奏技術は初学者相当であった。

3. 演奏方法の提案

本論では、国家資格試験の音楽に関する実技項目（全国保育士養成協議会、実技試験（後期）概要、9月10日閲覧）に求められる力として注記されている「豊かな表現力」に焦点を当て、童謡の旋律の演奏方法を論ずる。ピアノ演奏における「豊かな表現力」とは、音色や音量に変化があり、「美しく歌うように奏でる力」であると筆者は考える。

以上を踏まえ、実際の指導例から本論にて取り上げる提案内容は以下の3点である。

- ①フレーズを意識する。
- ②歌詞と音のつながりを考える。
- ③曲想を感じる。

上記の3点は、ピアノで「美しく歌うように」弾くために特に重要であり、なおかつ初学者が取り組みやすいと筆者が考える項目である。

3-1 フレーズを意識する

ピアノで旋律を奏でるにあたり、一本調子に聞こえてしまうという課題が頻発する。この場合フレーズを意識することが重要である。フレーズとは、まとまりをもった旋律の一区切りを表す。文章の句読点が打たれるべき所、始まりからその句読点までの一つのまとまりである。文章を音読する際、下記のように語気を強める単語の選択により声色に変化をつけることは誰しも日常的に行う行為であろう。近藤宮子作詞、作曲者不詳《こいのぼり》の一節を例に挙げる。

- (1) 屋根より高いこいのぼり⁽³⁾
- (2) 屋根より高いこいのぼり⁽⁴⁾

近藤宮子作詞、作曲者不詳《こいのぼり》より

上記のように、話し手は語気を強める言葉を選択することができる。フレーズの抑揚の付け方を研究する行為は音読の抑揚を検討する行為に類似する。演奏をする際も、フレーズの中でどの音を強めるか、または弱めるかという点を熟考し、発音するよう意識しなければならない。また、上記の例をもとに「こいのぼり」という単語の発音に着目した際、「り」のみを強めると不自然になる。同様に演奏に際しても、最後の音が極端に強くなっていないか等、不自然な響きとなっていないかを演奏者は絶えず聴き、考え、奏法に反映することの繰り返しが必要となる。

フレーズの奏法は多種多様だが、初学者に向けた基本的な理論として、ヴァルター・ギーゼキング及びカール・ライマーの著書における下記の記述が適当であると筆者は考えた。

あるフレーズを正しく演奏するためには、その初めと終わりをはっきり知った後、そのフレーズにふさわしい強弱の差と、適用されるべきアゴーギクの変化とが、もっとも大切である... 一般に頂点はクレッシェンドで導入される。それに続くのはクレッシェンドではなくディミヌエンドである。(1959 [訳1975]、p.134)

受講生に対する指導では上記の奏法を踏まえ、フレーズごとにクレッシェンドとディミヌエンドを用い音量を変え演奏することを意識させた。その際、フレーズの頂点はどこか、異なる種類の例を示し、実際に受講生に演奏をさせ決定した。対象 C と D はこの指導を的確に理解し、すぐに抑揚のある演奏へと反映することができた。対象 A と B の演奏は一度の指導では変化が見られなかった。そこで、A と B には始まりの音と終わりの音のみを弱く弾くよう注意を向けさせた。この手法では自然な歌い方へと到達することはなかったが、一つのフレーズの中で必要な強弱の差を実感する契機となった。対象 A には、上記の奏法が適応されないフレーズにおいても応用し、不自然な演奏となってしまふという問題が起きた。そこで、筆者は当該フレーズには上記奏法が適応できない理由を説明し、他の奏法を提案した。

3-2 歌詞と音のつながりを考える

童謡の旋律を演奏するにあたり、歌詞の意味を汲み取り演奏に反映させる必要がある。しかし、単語の発音と譜面の音価の不一致により、詩の内容と実際の演奏に乖離が起きていることが多くある。

文部省唱歌《はと》の楽譜（聖徳大学出版部、2022、p.28）では、「ぼっぼっぼ」の歌詞に対し旋律は四分音符が記譜されている。譜面に馴染みのない者にとっては簡潔でわかりやすい記譜だが、実際にこの音価を忠実に、かつレガートで弾いてしまうと「ぼっぼっぼ」という語感からは離れた演奏となってしまふ。西洋音楽においては作曲家の意図を楽譜から忠実に読み取り再現することは最優先事項である。しかし、上記の例では譜例 1 や譜例 2 のようにスタッカートや休符を意識して演奏することが相応しいと筆者は考える。演奏者は歌詞を実際に歌い、その語感どおりに演奏が成されているかをよく聴く必要がある。

歌詞と音のつながりを考えるという課題に取り組むにあたり、歌詞の語感を認識するの必要性を感じたため、受講生には歌詞をつけた歌唱を行わせ、ピアノの演奏と比べさせた。全ての受講生が歌うことで自ら語感を認識し、旋律の音価に変化を与えることができた。対象 A と B の取り組みでは、音価を変更することのみを意識してしまうことで同じ音色の音が並び、「豊かな表現力」はもたらされないという問題も発生した。ピアノは指を動かす技術のみに注視してしまうことがあるが、実際は体全体を使い音色で歌う楽器である。この感覚を理解し習得することは難しいため、初学者には頻繁にその重要性を説かなければならない。



譜例 1 文部省唱歌《はと》より 楽譜作成：筆者



譜例 2 文部省唱歌《はと》より 楽譜作成：筆者

3-3 曲想を感じる

筒井敬介作詞・村上太郎作曲《とけいのうた》のように歌詞全体の内容に注意を向けるべき作品がある。歌詞の内容により音楽全体の雰囲気が変わる作品も多いからである。このような作品を演奏するにあたり、場面によってしっかりと音色を変えられることができると、子どもの感性を刺激しより豊かな表現へと導くことができる。《とけいのうた》の楽譜（聖徳大学出版部、2022、p.155）は①1小節目～6小節目までの短音の印象が強い部分、②7小節目～10小節目までの音がつながり柔い印象になる部分、③11小節目～14小節目の①と似た雰囲気を持つ部分という構成で作曲されている。この作品の異なる二つの雰囲気をよく感じ、例えば①と③は元気に、②は優しい雰囲気で弾く、というように変化をつけることで「豊かな表現力」を伴った演奏が可能となる。ここでも、自身の感じた表現がしっかりと音となり現れているかをよく聴く必要がある。

指導においては、まず必ず筆者から受講生に対し作品の雰囲気や各部分をどの様に演奏したいかを問いかけた。すると全ての対象が表現したい内容を返答することができた。さらに、対象CとDは自身の持つイメージを演奏に反映することができた。対象AとBは作品の持つ雰囲気を感じることはできるが、その印象をすぐに演奏に反映することはできないという課題が見受けられた。対象AとBは、筆者から作品に対する表現を実現する技法の提案を受けることで、自身の抱く作品の印象に演奏を近づけることができた。対象CとDも、表現の幅が小さく「豊かな表現力」には及ばないと筆者が感じる事が多く、より大胆に表現をするよう指導をする場面が多かった。自身の表現が聴き手に届くほどの規模となり表出されているかを確認するために、奏者は常に自身の演奏をよく聴く必要がある。

この項目においては全ての対象に対し、相応しい打鍵方法の種類を検討する必要があるという指導も行なった。《とけいのうた》を例に挙げると、①ではスタッカートを意識し、指先の感覚を硬くし鋭い音を出す。それに対し②では指先を柔らかくし滑らかに弾くという2種類の異なる打鍵を用いることが可能である。対象CとDはこの提案もすぐに自身の演奏へと反映することができた。しかし、特に滑らかに弾くという技法に関し、音と音をつなぐ程度の発音にとどまり、レガートを実現するには至らなかった。数々の打鍵方法を習得し演奏に取り入れるには長い期間にわたる修練が必要となる。曲想に対する印象を明確に持ち、印象に合致した打鍵の検討を重ねる行為を長期間繰り返すことで「豊かな表現力」を伴う演奏が実現する。その過程においても必ず自身の希望する表現と実際の音が一致しているかをよく聴くことが重要であると確認された。

4. 考察

3-1から3-3の課題は、初学者に対する指導を想定として「豊かな表現力」を伴ったピアノ奏法を具体的に提示するために論じた。各項目において、受講生は自身が作品から受ける表現の印象を音に反映させられるようになり、一定の効果が確認された。旋律の歌い方には多くの可能性があり、指導において触れた点はその一つの可能性に過ぎない。3-1においては、筆者の提案を相応しくない旋律に応用し非音楽的な演奏となる問題、3-2では音価を歌詞に合わせることに集中し、旋律の抑揚がなくなってしまう問題、そして3-3では、曲想に合わせた技法を習得するためには長期的な修練が必要であるという問題が見受けられた。しかし、まずは「豊かな表現力」を伴った演奏を行う第一歩として、研究対象4名全員が抑揚のついた演奏を意識し、実現さ

せた点を評価したい。旋律の奏で方には多様な可能性が満ちており、必ずしも本論での提案が当てはまるわけではないという点は留意しなければならない。全ての項目において奏者が「豊かな表現力」を伴った演奏を実現するには、①変化をつけようと意識をする、②実際に演奏し表現を試みる、③音に反映されているかよく聴く、という一連の行為が重要であることがわかった。

5. おわりに

本論では、専門的なピアノの指導を受けた経験が少ない保育者に対する「豊かな表現力」を伴った演奏方法の提案を行うため、保育の現場における音楽の役割を確認した。その中で、子どもの表現を育てること、保育者の表現を高めることの重要性が指摘されているにもかかわらず、保育の現場では音楽的資質として「豊かな表現力」を伴った演奏は重要視されていないことが判明した。さらに、ピアノ奏法における保育者の表現力を高める具体的な研究は少ないという課題も見出され、研究の必要性がある領域であると認識された。以上を踏まえ、本論では保育者がピアノ奏法における「豊かな表現力」を習得するために、具体的な演奏方法の提案を行なった。童謡の旋律を演奏するにあたり、歌詞の意味や曲想をよく捉え、個々のフレーズの奏法を検討する必要がある。さらに、これを掘り下げると自身が奏でている音がイメージと合致しているか常に演奏に耳を傾けることの重要性が明らかになった。本論においては童謡の旋律を取り扱ったが、目標と掲げた「豊かな表現力」は「美しく歌うように奏でる力」であり、本論で提案した演奏方法の一案は、本校にて副科ピアノを履修する生徒をはじめ、ピアノの専門的な指導を受けた経験の少ない奏者への応用も期待できる。本論においては筆者による奏法の提案の列挙にとどまったが、保育者の演奏の変化や、その変化を受けた子どもの表現の変容を研究する必要があると考える。この研究の発展がより美しい音楽の普及と子どもの豊かな未来へとつながることを祈っている。

注

- (1) 保育の現場に携わった期間全てを指す。
- (2) 筆者の個人指導を受けた期間を除く。
- (3) 傍点は語気を強めることを意味する。
- (4) 同上。

参考文献

オンライン資料

一般社団法人 全国保育士養成協議会『実技試験（後期）概要』。

https://www.hoyokyo.or.jp/exam/guidance/practical_exam2.html（閲覧日：2023年9月10日）

和書

カバレフスキー、ドミトリー『子どもの心をひらく－カバレフスキーの音楽教育論』（Dmitri Kabalevsky, Music and Education: A composer writes about musical education.）坪能由紀子訳、東京：音楽之友社、1989年。

厚生労働省編『保育所保育指針解説』東京：フレーベル館、2022年。

ライマー、カール、ヴァルター・ギーゼキング『現代ピアノ奏法』（MODERNES KLAVIERSPIEL）井口秋子訳、東京：音楽之友社、1975年。

論文集

岩佐明子、富田英子、鳥丸佐知子「保育者養成校における音楽教育についての調査研究——音楽基礎知識及び鍵盤楽器の練習量と演奏技術の観点から——」、『京都文教短期大学研究紀要』第53集、21～30頁。

川見夕貴、峯村恒平「保育者の音楽的な表現が子どもの音楽的な表現に与える影響」、『目白大学総合科学研究』第19号、2023年、25～35頁。

近藤久美、吉弘淳一「現場の求める保育士の音楽的資質について——滋賀県内の保育所へのアンケート調査から——」『日本保育学会大会研究論文集』第54巻、2001年、634～635頁。

林京平「ピアノ弾き歌いにおける効果的な指導法について——初学者の学修効率化に向けて——」、『芸術研究：玉川大学芸術学部研究紀要』第14巻、2022年、31～38頁。

森田千智「子どもの歌の弾き歌いにおけるピアノ伴奏法」『東海学園大学教育研究紀要』第4巻、2020年、81～89頁。

横井志保「保育者は音楽的な表現の保育をどう捉えているか——保育士の語りの分析から——」、人文・自然化学編『名古屋学院大学論集』第58巻第1号、2021年、11～21頁。

楽譜

聖徳大学・聖徳大学短期大学部編『子どもと歌おう！《新版》幼児とともに』東京：学校法人東京聖徳学園聖徳大学出版部、2022年。